



干場弓子さんは「チャリティ・ブック・プログラム」(Charabon)という難民・被災民の自立支援活動にかかわる。五十歳を過ぎ、「出版にかかわる者として、いつかは社会に役立つことを考えていました」と話す。

社長を務める出版社「デイスカヴァー・トゥエンティワン」(東京都千代田区)は社員とアルバイト約五十人。昨年は八十八冊を出した。社長室はあるものの、デンと座って仕事をやるタイプではない。机の間を歩き回り、社員たちと話し合い、時にはジョークも。社内にはぎやかだ。小学校から高校まで名古

書籍販売を通じた自立支援活動をする 干場 弓子さん (53歳)

屋で育った。愛知県立旭丘高校からお茶の水女子大へ進み、雑誌を出す出版社に就職した。二十二歳で結婚、新婚の一時を米国で過ごした。当時、夫婦共働き、子どもなしで生活を築くDINKSという新しいライフスタイルが登場し、干場さんもまさにその最前線で仕事に突っ走った。

三十歳でできたばかりの今の会社の社長になった。当初、社員は自分を入れて三人。「人生における新しい価値観を提案する」という方針を掲げた。「アイン

「にやかに社員と話す干場弓子さん。社内にはぎやかだ」東京都千代田区で

シユタイン150の言葉、「無理なく続けられる年収10倍アップ勉強法」など十万、二十万部を超えるヒットが出て、業績は右肩上がりが続いてきた。

仕事に手応えを感じ始めた三十代半ば、「人間の幸せとは」「このままでいいのかなあ」などと考え込むようになる。夫と話し合い、三十八歳で長男を出産した。

五十三歳の今。仕事と仲間にも恵まれ、家には優しい夫と中学生になった子どもがいる。子どもの授業参観は欠かさない。PTAや高校の同窓会の役員にもなった。「若いころ、ずっといきいきと働きたいと思っていたけど、それを実現させ、なりました自分以上の自分になれたかも」と充実感を語る。

仕事の成功を社会に還元する具体的な活動がCharabonだ。仕事仲間の経済評論家、勝間和代さんが提案してきた。二つ返事で推進役の一人を引き受け、五月八日に正式発表にこぎつけた。

著者が自著の印税の20%を国際援助活動をするNGOに寄付するという仕組み。プログラム参加の書籍には帯やカバーに本と鳥のチャボをかたどったロゴマークがつく。

消費者が七百円の書籍を購入した場合、十四円が寄付にまわる。初年度に二十万円の寄付をめざす。他の著者、出版社も参加を表明し、活動は広がり始めた。六月から一部の大型書店で関連フェアも予定されている。

サイクロン被害などに関心を持つことができ、新しい視点を得ました」

これからの自分についてこう話す。「出産が人より十年遅れたら思っていて、その分、十歳若いと思つたね。まだまだ若いから、これからもいきいきと、オシヤレに仕事をしたい」

同プログラムについてのHPは「Charabon」で検索。(草間俊介)

仕事で得た幸せ 世に役立ててる時